

るは花の下つゆにかあらん。身にしむばかりの匂ひも、春はなかくにあかつきたきこそ樂しけれ

花の枝のしづくにぬれてむら鳥の

むら鳴くこへに夜は明けんとす。

望める悲哀

雪 二 生

我が心は冬枯の荒原にも似て、荒び果てぬる。是非なけれ、いら立ちたる精神は苔蕩百花悠艶の春も欲せず、昂ぶりたる神経は、佳人の膝も願はんとは欲せず、狂ひし駒の奔り躍るが如くに見る物を破らん、聞く物に腹立てんとあわれにも萎ひつゝ怒る、はかなさよ。

かく迄荒れにし我が心の、さてもわかしき極みなる哉。酒に酔ひてや、斯の狂を致せる、將た罪惡の應報にてや、斯程の態を演せる、否々皆あらじ、うつし世多くの人どもの、我を苛むるあり、惡辣なる社會の我を虐ぐるあり。なごかよわき一

夫を打ち据えて悲嘆せしむるぞ、されど、或人謂ひぬ、私の苦しむは世の罪ならで皆己が爲せる業ありと、さるにても己が繩もて己が身を縛り合へる罪の恐しき哉。

浮世の姿とは謂ひつれ、金も女も尽なる世界ならずや、御佛は、なぞ人知れぬ煩悶の底に我を置き玉ふぞ。まこと御陀は大悲にましますか、さても不思議の極みや。

なご、草々の事思ふに付けても、我心の愚かにして慈佛御前に、ぬかづき得ぬ我こそ重ねくの不幸ありけれ。(完)

元 旦

竹 鶯 (早川)

雞鳴報曉曙光新

瑞氣搖蕩萬象春

四海東風聖恩遍

椒杯獻壽大平民

延山曉雪

驚看積雪白埋堂

月落鳥飛逐曙光

五嶽八溪人不見

誰先來拜薦薰香